

葵から菊へ ～〈白書院〉一の間、二の間～

二条城二の丸御殿障壁画は、寛永3年（1626）、後水尾天皇（1596-1680）の行幸を前に行われた二条城の大改修の際、狩野派の絵師たちによって描かれました。今年度は、「シリーズ二条離宮の時代」と題し、離宮時代に焦点を当てて、二の丸御殿の障壁画を紹介します。

二条城は二条離宮へ

慶長8年（1603）、二条城は、江戸幕府を開いた徳川家康（1543-1616）によって創建され、寛永3年（1626）の後水尾天皇（1596-1680）の行幸のため、城域が西に拡張されるなど大改修されました。慶應3年（1867）10月、15代將軍慶喜（1837-1913）は、二の丸御殿で大政奉還の意思を表明し、朝廷がこれを認めたことで250年に渡る徳川幕府の時代が終了しました。

明治17年（1884）、二条城は、天皇の別邸である離宮となり、名称を二条離宮に改められます。これにより、主人が天皇へと変わりました。同30年代にかけて、皇室の宮殿にふさわしいよう、宮内省によって二の丸御殿の修繕がされました。圧倒的な大きさを誇る二の丸御殿遠侍をはじめとする破風に付けられた、城の主人を表現する徳川家の家紋「三つ葉葵紋」の飾り金物は、天皇家の家紋である「菊紋」に変えられ、二条城を訪れた人に、政権の交代が象徴的に示されたのです。

さらに、京都御所の北にあった桂宮家の御殿（桂宮御殿）が、明治27年（1894）に二条離宮の本丸に移築され本丸御殿になりました。これにともなって、唐門前から内堀を西橋で渡るルートで馬車道が整備され、また御殿の周囲に井戸や廁が確保されました。本丸御殿は二条離宮の中心となるべく整えられたのです。

二条離宮の〈白書院〉

二の丸御殿の最も奥に位置する〈白書院〉は、江戸時代に「御座の間」と称され、將軍の居室として使用されました。そのため、〈白書院〉の対面所は、他の二つの対面所である〈大広間〉と〈黒書院〉と違い、上段と下段の境に襖がはめられています。これにより上段である一の間は、15畳の隔てられた部屋になります。

二条離宮になった後、〈白書院〉は、新たな主人である天皇の御座所となりました。二の丸御殿の中には、いたる所にかつての主人、徳川家の家紋である「三つ葉葵紋」が飾り金物に散りばめられており、〈白書院〉も同様の設えがされていました。しかし、新たな主人である天皇がゆったりとくつろぐ〈白書院〉に、「三つ葉葵紋」はふさわしくありません。そのため、明治天皇を迎える準備として、明治19年（1886）に〈白書院〉だけは、格天井の辻金物や帳台構の縁金物にあった「三つ葉葵紋」が、上から被せたり、取り替えたりして「菊紋」に変えられました。また、年代は不明ですが、襖の引手金具も、菊紋を施したものに取換えられました。この時、「菊紋」の金物の大きさが「三つ葉葵紋」と同様になるよう、注意して細工されました。現在も、この時に取り付けられた「菊紋」の金物が、「三つ葉葵紋」を違和感なく

隠していることを確認できるものもあります。

翌20年（1887）、〈白書院〉は明治天皇を迎えました。

〈白書院〉一の間、二の間に描かれた障壁画

〈白書院〉は、他の棟を彩る金碧障壁画と異なり、水墨画で障壁画が描かれます。部分的な着色がされた墨画淡彩という技法で、湖岸の風景が俯瞰して描かれ、落ち着いた雰囲気演出されています。この湖は中国浙江省に実在する名所の西湖で、西湖図は日本において室町時代以降に好んで描かれた、水墨画を代表する画題の一つです。水墨による山水画は、最も格式の高い場所に描かれることが多く、〈白書院〉一の間、二の間の部屋の格式に呼応して、西湖図が描かれたと考えられます。

一の間の大床（正面に展示）には、雪景山水が描かれます。背景に薄墨を掃き、素地を残すことで雪が表現されています。画面右奥には、寺塔や楼閣を擁する岩山が屹立し、画面中央には水辺の望楼が描かれています。その屋内には、山水図を描いた衝立の前に二人の文人が座し、広い湖面を眺めています。

付書院横の戸襖（向かって左側に展示）には、中央に水辺の懸崖を現し、その上には木々に囲まれた家屋があり、また水辺の松下の篷台に座り込み、魚を採っている人物がいます。

二の間との境の襖（向かって左側に展示）には、水辺の樹林にかこまれた楼閣や楼門に一童子を従えて進む二高士の姿が近景で、また山影や樹林の間に見える楼閣が遠景で描かれています。特徴的な西湖の堤である蘇堤あるいは白堤と思わしき堤を見ることができま

す。二の間の南側（向かって右側に展示）には、柳に囲まれた屋敷が描かれています。その右側の水面には、屋敷に向かう文人を乗せた一艘の船があり、屋敷の中庭には客人を迎え出る主人らしき男性が、門の前には赤子を抱いた女性と子供の姿が見えます。

二の間の西側（向かって右側に展示）には、楼閣や橋のある山水に小さく人物が書き込まれています。橋の上には、牛に乗った僧形の人物が、その左隣の戸襖には四阿で休憩する高士と従者が描かれます。

違棚を除けば、どの画面も下部を水辺としており、湖上に浮かべた船に乗って岸辺を見渡すような景観が、部屋の中に広がります。また、違棚上部の小襖（正面に展示）には、撫子が描かれています。いつの頃か、この小襖は裏面が表面となるように反転され、仕立て直されたと考えられています。

障壁画の筆者は、狩野長信（1577-1654）とされます。

降矢 淳子（元離宮二条城事務所 学芸員）